



筆

## 第三の道

——オセアニアが模索しているもの——

山口 修\*

### オセアニアの現在の姿

広大な太平洋のほぼ南半分におよそ1万の島々が散らばっている。そしてニューギニア島という最大の例外と2～3のやや大きな島を除けば、そのほとんどが小さな島であり、しかも互いに離れた所に位置している。現在、これらの島々は21の行政上の区分で分けられている。その中には独立国もあれば、やっと自治領として認められたばかりのものもあるし、また、地理的にはオセアニアに属さない国の一部分となっているもの（USAの1つの州としてのハワイのように）、そして、事実上いまだに「西側」の植民地のままでいるところもある、といった具合に政治経済的にさまざま異なる状況におかれているのが現状である。

それに加えて、もともとオセアニアは「オセアニア」という1語で簡単にまとめてしまうこと自体が疑問であるほどに多様な文化をくりひろげてきたし、その延長上にある現在では多少画一化の傾向が見られるとはいえ、やはり文化の多様性が顕在している点では昔日と違っているわけではない。便宜的にオセアニア全体をポリネシア・ミクロネシア・メラネシアという3つの大きな地理区分で整理することは意味がないわけではないが、物質文化・事象文化・社会文化・精神文化といった側面からオセアニアを見つめなおしていくと、そこには微妙に違い違った線が浮かびあがってくるのを認めないわけにはいかなくなってくる。

しかし、オセアニア全体にほぼ共通して見られる現象も現在はある。それは、人口動態にか

かわる2つの事実、すなわち、第1にある地域での中心の島への人口の集中——いわば「都市化」「過疎化」という形で——、そして第2に年平均2.4パーセントという率で上昇する人口の自然増である。かつてヨーロッパの「航海と探検の時代」そしてそれに続く「植民地政策の時代」の結果として現れた急激な人口減少——主として新しい病気がもちこまれたことに起因し、人口の絶滅をこうむった島さえあった——そして同時に進行したキリスト教化と「近代文明」の導入によって急激な文化変容を余儀なくされた経験を深く反省する余裕もないままに、現在のオセアニアは新たな試練の時代を迎えたといつてよいだろう。

### 問題解決のためには無意味な第一の道

大国がかかえる人口問題とは規模が全く違うとはいっても、特定の地域に人口が集中し、しかも幼若年層が人口の半分以上を超えようになると、やはりいろいろな社会のひずみが生じてくることには違いがない。その問題の解決のためにとるべき道として、「伝統主義」が唱えられることがある。つまり、それぞれの部族は本来の自分の島にもどって昔の生活をやりなおせばよいのだ、とまでは極論しないにしても、それに類するような論議がきかれる。しかし、一度味わった近代的な文明の甘い汁をすてるのはむずかしいし、若年層ともなれば伝統そのものが直接体験されているのではないので、伝統的な技術と生産の様式に立ちかえることに意義を見出すのが困難であろうし、ましてや変容した価値観をもって伝統的な芸術や生活をパフォーマンスすること自体意味をなさないだろう。

伝統というものはどの民族にあってもけっしてステティックなものではなく、常に時間（時

\*山口修 (Osamu YAMAGUCHI), 大阪大学, 文学部, 美学科, 音楽学講座, 助教授, M. A. 民族音楽学



写真1 南太平洋大学 (USP) 教育学部 (フィジー) の英語文学講師ピオ・マノア氏夫妻。氏は太平洋諸島の人々の手になる現代文学を通じて新しいアイデンティティを模索している。



写真2 WHO フィジー事務所々長の栗祐増<sup>ツヨシ</sup>氏はいわゆる「近代医学」をそのままオセアニアに導入するよりも「伝統医学」との融合の必要性を熱っぽく説く。



写真3 パプアニューギニア大学 (UPNG) 学長代行のエルトン・ブラッシュ博士が地理学書の出版記念パーティで大学のスタッフに激励の言葉を述べている。この大学は大学の要員を現地化することに熱心である。

代)の経過とともに新しい要素が内外から加えられて大なり小なり変化していくものではあるにしても、オセアニアの人々がこうむった搾取と変容はあまりにも大きすぎて、したがって再び取りもどすのが不可能であるだけでなく、そこに価値を見出すこともあり得ないだろう。1970年代のはじめから現在にいたるまで急速に唱えられているハワイアン＝ルネサンスという運動がハワイにはあるが、これはけっして単純にかつての伝統を復興させようという動きではない。ハワイアン＝ルネサンスがもっとも端的に実行に移されている音楽と舞踊の活動に着目すれば、そこには積極的に過去の伝統をふりかえってみる努力を通じてむしろ新しい様式を築きあげようとする意図が強く現れていることから、それが単純な伝統への回帰ではないということが理解される。

#### 問題解決のためにやはり無意味な第二の道

それでは、オセアニアの人々はいわゆる「近代化路線」をしくべきなのだろうか。すでに高度な産業化を達成した日本を1つのモデルとして設定してひたすら機械文明化の道をすすむのがよいのだろうか。良識ある日本人ならだれでも、日本が明治以後たどってきた道程のすべてが正しかったとは認めないに違いない。現代におよんで公害問題に直面している日本は、これから発展を遂げようとしている国々に対して反省すべき材料としての日本の現状を知らせる義務があるように思われる。

機械文明というものは、それ自体魅力のあるしろものであることは否めない。快適な文化生活を可能にしてくれる近代的な生産技術をさらに向上させることが必要であり続けることも自明の理ではある。しかし、そこには明確な価値意識に裏付けられたある種の「哲学」がなければならぬのではなかろうか。単なる「パンのための学」としての「生産と技術」にかかわる諸学であったのでは、人間らしさが失われることになるに違いない。その徴候が公害などの形で現われているともいえよう。

人間らしさを再び取りもどすためには技術を生産文化の一側面として位置づけることが必要であ

ろう。「パンのための」技術から「芸術活動のための」技術にいたる連続線上にあるさまざまな技術の局面は文化の实在化を支える重要な契機であると再評価しない限り、機械文明は人間に幸福をもたらさないといっても極言ではなからう。

### 問題解決のための第三の道

文明化はさまざまな自然環境の中でさまざまな人間集団が営んできた、営んでいる、営むであろう生活のすべての側面を包含している。いわゆる文化生活だけが文化だというのではけっしてない。

この認識に立てば、人類のあらゆる地域のあらゆる時代の文化がそれぞれそれなりの価値をもっていると考えられるようになる。そして、さまざまな発展の段階を示す技術のさまざまなありようは価値の段階を示すとは限らないという考え方にたどりつくことができる。さらに、どのような技術がどのような文化に役立てられ得るかという問題は、人間の置かれた環境によって解答が違ってくるということにも気づく。

とすれば、オセアニアという、世界の中でも例外的な環境の中で営まれる文化にとっては、

他の場合とはかなり違った方策が必要であるに違いない。オセアニアの人々はさすがにこれを察知していて、これから将来にむけてとるべき道を名づけて「太平洋的な道 the Pacific Way」といつている<sup>1)</sup>。

伝統的な文化——当然、技術を含めて——をふりかえり、それを深く理解することなしには新しい文化の形式は意義あるものとはなり得ないという考えに基く「太平洋的な道」の思想はまだ具体的な方策を探りあてるにはいたっていないとはいえ、日本の現代的問題の解決のためにも示唆が多いように思われる。それを深く理解するためには、単なる傍観者として南の隣人の苦悩する姿を眺めているだけでは充分でない。試行錯誤の努力に協力することが必要なのである。そしてそれは互恵的であるに違いない。ただし、一見無関係のようにも見えかねない文化全般の理解の努力を同時進行させなければ、いかなる技術協力も、あるいは経済交流も表面的なものに終わってしまう、したがってよい結果は得られないのである。

注1) KAVALIKU, Langi (1980) "A strategy for Pacific Islands development" Pacific Perspective 9/2: 62-76.